

中部森林管理局  
木曽森林環境保全ふれあいセンター  
平成17年度 年報

平成18年3月31日発行

〒397-0001 長野県木曽郡木曽町福島5471-1  
TEL 0264(22)2122 FAX 0264(21)3151 E-mail kiso-fureai@rinya.maff.go.jp

## 木曽森林環境保全ふれあいセンターの1年を振り返って

木曽森林環境保全ふれあいセンター（以下当センター）では、平成17年度も様々な活動を行ってきました。その一部を紹介し、この一年間を振り返ってみたいと思います。なお、長野県木曽郡の旧木曽福島町、旧三岳村、旧開田村、旧日義村が、合併により現在は木曽町となるなど市町村の名称が変わったものもありますが、その時点で旧市町村であったものについては修正せずにそのまま記載しています。

### 4月

#### 「緑の挑戦者」森づくりへ間伐作業

4月16日、「NPO法人緑の挑戦者」の森づくり協力事業が木曽福島町有林で実施され、愛知や三重、東京方面から32人が参加して間伐作業に汗を流しました。

この取組は、同法人が平成16年度からスタートさせたもので、きれいで豊かな水を利用できるように、水源地の山の手入れを体験しながら育林作業を続けています。

今回の作業は、木曽福島町林業振興会や役場職員、当センター職員の指導のもとで行われました。

現地は40余年生のカラマツ林（面積約4ヘクタール）で、今回の参加者は初心者も多かったことから、作業上の注意事項、木の倒し方等を念入りに聞いた後、安全に注意しつつ慎重に作業を行いました。

初めて参加した人のひとりには、「こんなに山奥に入ったことはないし、木を倒すのもおもしろく、いい経験になりました」と言っていました。



作業に参加した緑の挑戦者のメンバー

#### 森林ガイド養成のための研修会を実施

長野県木曽福島町の城山国有林を中心とした活動拠点整備を行っている城山史跡の森倶楽部では、名古屋圏から城山への日帰りツアー等を計画していましたが、同倶楽部には森林ガイドの経験のある会員が少なかったことから、4月21日、当センターの協力のもと、森林案内のガイドを養成するための研修会が行われました。

研修会には「名もない山にも文化や歴史がある」を合い言葉に、城山の自然や歴史に関する知識を身に付けようと集まった有志20名が参加しました。参加者は、出来上がったパンフレットを手に、新設したばかりの歩道等を散策しながら城山の歴史や植物等お互いの得意分野の知識を出し合いました。

努力の甲斐あって、GW期間中には延べ300名程の方が城山を訪れ、参加者は同倶楽部などのガイドのもと、気持ちよく色鮮やかな新緑の山を堪能することができたとのことです。



森林の仕組みの説明をする当センター鷹野所長

## 5月

### 地球緑化センターの活動への協力

NPO法人地球緑化センターによる除伐作業が5月14、15日の2日間、長野県上松町の赤沢自然休養林で実施され、当センターからも職員が参加し、除伐作業の安全等に関する指導を行いました。

また、14日の夜は、木曾の森林と伊勢神宮の御杣始祭に関する話などを中心とした囲炉裏を囲んでの森林教室等を実施しました。

なお、このボランティア活動は、同法人が市民参加の森づくりを進めるため、平成8年5月から行っている「山と緑の協力隊」としての活動の一環で、中部森林管理局とふれあいの森の協定を結び、作業区域を「大樹の森・赤沢」と命名して作業を行っているものです。

今回の作業は、ヒノキ林を育成するため、ヒバの除伐とヒノキの劣勢木を除・間伐するもので、おいしい空気を胸いっぱい吸って作業を行った参加者は一様に大満足の様子でした。



作業現場をバックにして記念撮影

### 未来世紀へつなぐ緑のバトン

昭和59年（1984年）の長野県整備地震で大規模な土砂崩落のあった王滝村の災害跡地で、5月28、29日の2日間、愛知、岐阜、三重の中日森友隊のメンバーの約150人など350人が森林ボランティア活動を実施しました。

参加者は、森林の再生を目指して災害跡地に、昨年同村内で拾ったドングリから育てたミズナラを、当センター、木曾森林管理署、王滝村役場職員の指導を受けながら植栽しました。

この活動などにより震災の記憶が後生に受け継がれるとともに、水源地への関心が高まってくれることを期待したいと思います。



ミズナラの苗木を植える子供たち

## 6月

### 地元高校の体験学習を支援

6月2日、当センターでは長野県木曾地方事務所などと協力して、地元木曾高校の体験学習への支援を行いました。

これは例年、木曾福島町郊外の木曾高校学有林において、学園祭のキャンプファイヤー用の燃料材調達を兼ねて実施されているもので、昨年度に引き続き当センターや地方事務所の職員らの指導もと、生徒たちが作業に汗を流しました。

昨年は、伐倒と玉切りを両方行いましたが、今年の山はかなり林齢の高いカラマツ林だったため、安全面に配慮して既に伐倒されたものを玉切って林外に運び出すだけとなりました。

そのかわりに、今年は木曾福島町の林研会員によりチェーンソーを使った伐倒作業のデモンストレーションが行われ、その後で実際の作業が行われました。

山で作業をした経験など全く無い普通科の生徒たちばかりでしたが、生徒たちは皆一生懸命で、約2時間の作業で、必要な木材を何とか林外まで持ち出すことができました。生徒たちは一様に満足した様子で学校への帰路につきました。



生徒を指導する当センター土屋指導官

## 7月

### 木曾山林高の生徒が職業体験

木曾山林高校（木曾福島町）の林業科の2年生6名が、7月27日～8月2日までの5日間（土、日曜日除く）、当センターの指導のもと、就業体験にチャレンジしました。

この就業体験は「ずく出せ修行」と言い、長野県教育委員会が特別活動の一環として実施しているものです。体験期間中は、城山国有林での歩道の整備や長野県西部地震の被災跡地での植生状況調査等を行いました。

まず初日には、作業に入る前の安全指導と草刈り鎌などの道具の整備を行いました。指導した鷹野所長は、「切れる刃を付けることが基本であり、作業を楽にすることにもつながる」と説明し、砥石に当てる角度などについて詳しく教えました。

また最終日には、6名全員に感想文を書いてもらいましたが、その中で生徒たちは、  
○森林整備の作業における「接近作業の禁止」については学校で教えてくれたが、「上下作業の禁止」は習わなかった。傾斜地では石や木が落ちてくる可能性の大きいことにあらためて気づいた。  
○調査は6名一緒に行ったため、段取り、チームワークが大事だということがわかった。  
○高校でも実習が沢山あるので、今回の体験を参考にしながら安全な作業を行えるようにしていきたい

い。

○この「ずく出せ」就業体験で学んだことを、学校生活や将来就職するときに役立てたい。

○将来は、森林関係の仕事に就こう考えている。など書いていました。

今回の体験が、生徒たちが将来社会に出た時に役立つ貴重な体験となることを願っています。



刃物の取扱を教わる木曾山林高の生徒たち

## 8月

### 地震の被災跡地で高校生が除伐体験

昭和59年（1984年）の長野県西部地震で大規模な土砂崩落のあった王滝村の御岳山山腹で8月9日、愛知県立阿久比高校（阿久比町）の生徒72名と先生5名が、当センター、木曾管理署職員の指導のもと除伐作業による森づくりを体験しました。

作業を行った濁沢は、災害当時、沢筋全体が土砂に埋まり、それ以来、ヒノキ、サワラ、ミズナラ、カンバ、ヤマハンノキ等による植生復元がボランティアを中心に進められていますが、今回の作業ではヒノキなどが深く根を張って育つよう、直径10cmほどに育ったヤマハンノキなどを一部除伐しました。

この活動は、阿久比高校によるボランティア活動の一環として実施されてきたもので、今年で9年目になり、参加者は延べ730名に達しています。

参加者の中には、2年目、3年目の参加者もあり、「高校生活の中で一番印象に残る体験ができた、この経験をこれから糧としたい」と話していました。

また、今年が初めての参加となる一年生の中には、「このぎりの使い方が難しかったが、楽しい経験ができた。来年も来たい。」という生徒もあり、皆一様に満足した様子で作業を終了しました。



一生懸命作業に取り組む阿久比高の生徒たち

## 9月

### ボランティアによる植生復元作業を実施

中央アルプス木曾駒ヶ岳の登山道周辺で9月29日、高山植物等の植生復元のための作業が地元ボランティア等の協力を得て実施されました。

この活動は、当センターが取り組んでいる「自然再生推進モデル事業」の一環で、昨年度、航空写真等を基に木曾駒ヶ岳周辺における裸地化の著しい区域を特定したのに引き続き、調査の結果を踏まえ実際の植生復元作業に着手したものです。

前日の天気が嘘のような晴天のもと、作業は信州大学農学部森林科学科の有志のほか、NPO日本高山植物保護協会、中央アルプスガイド組合、長野県、宮田村、駒ヶ根市など総勢26名が参加して行われました。

参加者はまず、駒ヶ岳ロープウェーの終点千畳敷駅から背負子を使って、植物繊維マットやマットを固定するための釘やハンマーなどを200m上の宝剣山荘付近まで運び上げ、その後、裸地化の特に著しい登山道周辺約200m<sup>2</sup>にマットを敷設しました。この植物繊維マットは、雨水や風による土壌の流出などを抑え、高山植物の発芽や生育を助ける目的で敷設されるもので、区域外からの植物が混入しないようあらかじめ熱処理を施したものを使用しています。

作業にあたっては、なるだけ地面と密着するよう浮き石を取り除いたうえでマットを敷き、釘や取り除いた石により一枚一枚丁寧に固定するよう心がけました。最初は大部分の参加者が慣れないこともあり、何度もマットを張り直しましたが、慣れてくるにつれ次第に作業効率も上がり、2時間ほどで全ての作業が完了しました。参加者は、一様に自分たちの作業の成果に満足した様子で、重い荷を背負った

登りとは違った軽い足取りで現地を後にしました。

作業の様子は地元新聞社に掲載されたほか、その日のTVの地方ニュースでも取り上げられ、木曾駒ヶ岳周辺の自然環境に対する地域住民の意識の高さが感じられました。

本年度の作業はこれで最後となりますが、当センターでは、ボランティア団体等との連携を図りつつ、来年度以降も引き続き植生復元に向けた取組を実施していく考えです。高山帯の植物群落を再生させることは非常に難しいことではありますが、花や緑いっぱいの山を取り戻すことを目標に頑張りたいと思います。



植生マットの敷設作業の様子

## 10月

### 水道施設設計業者等が森林整備に汗

10月22日、中部九県の水道施設設計業者らでつくる社団法人全国上下水道コンサルタント協会中部支部の会員と、木曾川上流の森づくりを通じて地球環境保護を呼びかけているNPO法人緑の挑戦者併せて約80名が、同協会設立20周年の記念事業として、木曾福島町の町有林においてボランティア作業を実施しました。当日は、当センター、木曾福島町林業振興会、地方事務所林務課が協力して指導にあたり、参加者一同は、木曾福島町有のカラマツ林において森林整備作業にチャレンジし、心地よい汗を流しました。

また、普段水道設計業に携わる人たちは、今回の作業が初めてという方が多かったため、林内での移動もごちなく、傾斜のある登り降りにも戸惑った様子でした。



森林整備作業に取り組む参加者たち

慣れない森林整備作業は、思ったより重労働だったようでしたが、ある参加者の方からは「水を扱う仕事をする団体として、大切な水源保護のため今後も森林整備作業等が続けていきたい」という感想もいただきました。

## 11月

### 地元NPOとあずまの改修作業を実施

当センターでは、長野県上松町の赤沢自然休養林で11月15日、地元NPO「木曾ひのきの森」と協力して、長年の使用で地面の土が減っていた施設内のあずまの改修作業に取り組みました。

「木曾ひのきの森」は、赤沢自然休養林を中心に森林ガイドや自然保護活動を展開している特定非営利活動法人（NPO法人）で、隣町の木曾町における「城山史跡の森倶楽部」への活動にも協力しています。

改修作業に取り組んだあずまは、遊歩道の入口付近に作られたもので、観光客の雨宿りの場として利用されていたものの、大雨の際などに周囲から雨水が流れ込んで使いにくくなっていたものです。

参加者らは、屋根の下の広さ約50m<sup>2</sup>の地面をならし、簡易舗装材を敷く作業に汗を流しました。使用した簡易舗装材は、練り作業が不必要なタイプで、水をまんべんなく散布して1～2日程度放置すれば自然と固まるものです。強度的には普通のコンクリートよりだいぶ劣りますが、人力でも施工が可能のため、ボランティア活動による歩道の整備等の際には便利な材料と言えます。

また、作業終了後、同NPOの横井理事長は新聞社からの取材に対し、「車いすでも使いやすいようにした。雨降りの時でも森で気持ちよく過ごしてほしい」と話していました。



舗装材を平らにならす作業の様子

## 12月

### 城山史跡の森を視察

例年より早く雪が降った12月初旬、当センター、城山史跡の森倶楽部、木曾町役場が共同で、城山における平成18年度の活動計画を策定するための現地視察を行いました。

葉の落ちる冬期は、見晴らしも良く動物の足跡なども分かり易いため、自然観察にはもってこいです。標高差も少なく町からのアクセスも良いため、冬山に慣れていない人でも気軽に雪中でのトレッキングが楽しめるのも、木曾城山の魅力の一つだとあらためて感じました。

この日は天気も良く、参加者全員が城山のすばらしさを再認識する良い機会となりました。当センターでは、今後も様々な方面と連携し、力を合わせて城山を魅力あるフィールドにしていきたいと考えています。



視察に参加した当センターと史跡の森倶楽部の面々

## 1月

### 城山史跡の森倶楽部との打合せを実施

1月16日と30日、当センター、城山史跡の森倶楽部の事務局、同倶楽部の活動をサポートしてくれる顧問の方々、木曾町役場らが一堂に会して来年度事業計画策定に向けた打合せが実施されました。

打合せでは、3月に実施する同倶楽部の総会の日程調整、冊子の発行、自然観察会の開催内容、歩道整備の箇所、大都市圏等へのPRの方法、官公庁からの支援内容など多岐にわたる内容が話し合われ、同倶楽部の平成18年度における活動計画の骨子がほぼ固まりました。

活動計画が総会で承認されれば、4月からさっそく歩道整備やイベントが実施されることとなり、春が来れば当センターにも再び慌ただしい時期がやってくることになりそうです。冬の間の充電期間に十分な準備をしておく必要があります。

## 2月

### 木曾駒の植生復元に関する検討会を実施

当センターでは、2月22日、中央アルプス木曾駒ヶ岳における植生復元に関する検討会を、南信森林管理署の会議で実施しました。会議には、信州大学の土田先生をはじめ、駒ヶ根市、宮田村、地元のNPO、山岳会などから30人が参加し、今後の植生復元の進め方などについて意見交換が行われました。

この日も9月のマット敷設作業時と同様、会議の内容が複数の新聞に掲載されたほか、TVの地方ニュースでも会議の様子が伝えられ、関心の高さが伺われました。

会議では、本年度実施した調査の結果や9月に行ったヤシ繊維マットによる植生復元の試みについての報告の後、信州大学によるリモートセンシングを活用した調査の詳しい内容の説明が行われ、最後に平成18年度以降における当センターの取組の方針を説明しました。

参加者からは、今後の進め方について「木曾駒ヶ岳周辺全体の植生復元計画を立てた上での実施を」「地域全体の自然を保全する一つに植生の復元がある。本格的にやる体制づくりが必要」など幅広い観点からの取組を求める意見も出されました。

これらの意見も十分踏まえつつ、当センターとし

ては来年度も植生復元に取り組んでいきたいと考えています。



今後の活動の進め方について説明する中熊指導官

## 3月

### 城山史跡の森倶楽部が総会を実施

3月7日、城山史跡の森倶楽部が木曾町福島の旧森林技術センターで総会を開催し、平成18年度の事業計画が決定されました。

総会では、まず平成16年11月に官民が協力して山づくりを進めるとの協定を、木曾森林管理署と結んで以来取り組んできた遊歩道整備や案内板の設置、自然観察会の開催等の事業内容が報告されました。様々な活動の甲斐あって、これまで年間数百人しか訪れなかった城山に、昨年は団体客だけで1800人を超える人が訪れたとのこと。

また、平成18年度の事業計画では、平成17年度同様に自然観察会を開催したり、歩道整備を実施したりするほか、城山国有林等で確認された500種類の植物のうち約200種類をカラー写真と説明文で紹介する冊子を発行することが提案され、出席者の全会一致で承認されました。この冊子は一部500円で販売し、JR木曾福島駅前の観光案内所や地元の旅館等で購入できるようになる予定です。

当センターとしては、平成18年度の事業についても同倶楽部に対して積極的な協力をを行い、官民が連携した山づくりを進めていきたいと考えています。

# 自然再生への取組の紹介

## 1. 長野県西部地震災害復旧跡地における自然再生活動

長野県西部地震（昭和59年9月発生）災害跡地では、20年間にわたり治山事業やボランティア団体による自然再生へ向けた活動が実施されており、それらの成果によって徐々に森林が再生されているところです。

現在、同地域においては、ボランティア等により緑化樹種として植栽されたヤシャブシ、ハンノキ等が生長し、肥料木として一定の成果を果たしていますが、今後はヒノキ、サワラ、ミズナラ等の在来樹種による植生への誘導等を見据えた再生を図っていく必要があると考えられます。

このため当センターでは、平成16年度から災害跡地及びその周辺地域において様々な活動を実施しており、平成17年度は有識者のアドバイスを受けながら現地調査を実施するとともに、ボランティアによるこれまでの再生活動の軌跡をまとめた冊子を作成しました。



完成した冊子の外観

### (1) ボランティアによる様々な活動

王滝村では、平成13年から「未来世紀へつなぐ緑のバトン」が行われており、中日新聞社の社員などにより結成された「中日森友隊」を中心に、多数の方が森林ボランティア活動に訪れ、作業に汗を流しています。平成17年度は、都会で育てたミズナラの苗木を災害跡地に植える「春の植樹祭」が5月

28、29日の2日間、どんぐりの種拾いや除伐作業等を行う「秋のどんぐり拾い」が10月22、23日の2日間にわたって実施されました。

春の植樹祭では、当センター、木曽森林管理署、王滝村役場職員の指導のもと、前の年に同村内で拾ったどんぐりから育てたミズナラが植栽されました。秋のどんぐり拾いでは、除伐作業等と同時に付近の枯葉を拾い集めたものに石灰などを混ぜ合わせて腐葉土を作る試みも行われています。

王滝村の災害跡地では、この他にも8月に愛知県立阿久比高校の生徒が除伐作業を行うなど、多くのボランティアが活動を行っています。



緑のバトンに参加した中日森友隊

### (2) ボランティア活動に関する冊子の作成

多くのボランティアによって支えられている災害跡地における自然再生活動ですが、これまで体系的に取りまとめたものがなく、活動の全てを紹介する事が出来ませんでした。

そこで当センターでは、約20年にわたるボランティアの活動を振り返る「緑豊かな森林の再生をめざして～ボランティアによる長野県西部地震跡地の再生～」を、災害直後から復旧に取り組んできた中日新聞社をはじめ、様々な個人、団体の方の協力を得て作成することにしました。

完成した冊子は、作成に協力していただいた関係者に配布するとともに、今後の活動を担ってくれる地元や都会の子供たちの手にも届けたいと考えています。



完成した冊子の外観

### (3) 現地調査の実施

当センターでは平成16年度、災害跡地において土壌組成、樹種構成、林分構造などに関する現地調査を行うとともに、調査結果に基づいたゾーニングを行い、それぞれのゾーン毎に最適と考えられる樹種、具体的な施業計画についての基本指針を作成しました。

さらに平成17年度は、継続的な実態把握のために調査区域全域を細かく区分してそのエリア毎に番号を割り振るとともに、信州大学の植木先生のアドバイスを得ながら、長期的なモニタリングのための固定プロットを設定し、プロット内の樹冠投影図作成等の現況調査を実施しました。

一見地味な活動ではありますが、これらは植生の再生、その後の遷移をモニタリングしていくために必要不可欠なものと考えられます。今後は定期的に調査を行い、ボランティア活動の計画策定等にも役立てていきたいと考えています。



災害跡地で実施した現地調査の様子(H17.5)

### (4) 今後の進め方について

ボランティア活動等によって復旧が進んできた長野県西部地震災害跡地ですが、その一方で今後どのような進め方をして行けばよいのかについては、検討の必要があります。

災害跡地の大部分は、土石流の堆積物に客土を施して植栽されたものであることに加え、寒冷地であるため有機物の分解も遅く、まっとうな森林土壌が形成されるまでにはまだまだ長い年月を要します。このままヤシブシやハンノキをただ除伐してもすぐにヒノキやミズナラの森に遷移していくことは考えにくいのが現状です。

これからの活動については、現在検討段階ではありますが、来年度からは植樹や除伐だけでなく土づくりなどにも本格的に取り組んでみたいと考えています。どの程度効果があるのか定かではありませんが、災害跡地を少しでも早く本来の自然環境に近づけることが出来れば良いのではないかと考えています。

## 2. 中央アルプス木曽駒ヶ岳周辺における自然再生活動

中央アルプス木曽駒ヶ岳周辺においては、登山者の入り込み増加に起因する踏み荒らし等によって、高山植物の荒廃が進行しています。加えて大量の降雨や融雪水、凍結融解による砂礫の移動、強風が植生荒廃に拍車をかけており、このまま放置すればこれらの貴重な高山植物の更なる衰退が懸念されています。

このため、当センターでは平成16年度から中央アルプス木曽駒ヶ岳周辺地域における植生復元に取り組んでおり、平成17年度は昨年度の調査結果等をもとに今後5年程度かけて試験的に植生復元を行う区域を設定し、9月末には地域のNPOやボランティアと協力してヤシ繊維マット敷設による植生復元作業を行いました。

また、平成17年7月と平成18年2月には、有識者、地元自治体、NPO等の参加による植生復元に関する検討会も実施しました。会議では、これまでの活動の成果を踏まえた活発な議論が行われました。





残雪の残る木曾駒ヶ岳千畳敷カール(H17.6)

### (1) 調査の実施、植生復元実施計画の作成

平成16年度の調査では、1963年（昭和42年）と2000年（平成5年）に撮影された空中写真等をもとに、駒ヶ岳から空木岳に至る広い範囲におけるハイマツを主とした植物群落の荒廃状況を確認しましたが、平成17年度は、それらの結果をもとにより詳細な植生・環境調査等を行い、試験的に植生復元を実施する区域を選定するとともに、その区域における具体的な植生復元の実施計画を作成しました。

また、植生復元の実施区域については、平成16年度調査により顕著な植生の荒廃が見られた区域の中から、①踏圧等による人為的要因による荒廃の可能性が高いこと、②資材の運搬・保管が可能であること、③ボランティア等による作業が可能であること、④登山者・観光客に対するアピール度が高いこと等を考慮した結果、ロープウェー終点の千畳敷から木曾駒ヶ岳に至る登山道の途中にある宿泊施設に隣接する区域、約1000m<sup>2</sup>が選定されました。



植生復元の実施区域

実施計画では、この区域の植生復元作業を3～5年程度かけて行うこととしていますが、平成17年度については、ヤシ繊維マット210m<sup>2</sup>を敷設しました（作業の詳細内容については、年間活動の部分でも紹介しています）。

今回の実施箇所については、植物の発芽や定着の状況等をモニタリングし、それらの結果を踏まえながら、次の作業を進めていくこととしています。



植生復元作業の準備をするボランティアたち

### (2) リモートセンシング技術の利用

平成16年度の調査においても、航空写真や地球観測衛星 LADSAT の画像を利用した詳しい解析を行っていましたが、解像度の低さからハイマツの群落を判別するのが精一杯で、高山植物等の状況を把握することは出来ませんでした。

ただ、これから標高3000m近くに達する高山帯の広大な区域を継続的にモニタリングしていかなければならないと考えれば、リモートセンシング技術の活用は不可欠なものであるとも言えます。今回の調査では、信州大学の加藤先生の研究室の協力により、高山植生が航空写真にどのように写りどの程度まで把握が可能かについての検討も行いました。

また、今回の調査に使用したのは、地上分解能が15cmという超高解像度のデジタル航空写真で、機材の提供や航空写真の撮影にあたっては、大手測量コンサルタントの株式会社パスコが協力してくれました。

調査では、まず7月28日に航空写真の撮影を行い、撮影された写真について画像解析ソフトを使った様々な解析を行うとともに、撮影された現地にお

いて実際の植生状況を調査することにより、植生がどのように写り、どの程度の解析が可能となるのかが検討されました。

調査の結果、ハイマツ群落やお花畑の植生については、かなり明瞭に境目が区別できることがわかりました。その一方で、岩場や裸地にポツポツと生えている植物については、岩などの光の反射が強いため誤って認識されているという結果も出ました。

今後は、より詳しく現地調査を行い教師としてのデータを蓄積することにより精度を高めた植生図を作成することや、反射スペクトルを詳しく分析することにより植生の活性度を把握することなども十分可能と考えられます。

これらの結果が、木曾駒ヶ岳周辺だけでなく人の入ることが困難な脊梁山地におけるモニタリングに活用されることを期待したいと思います。



マット敷設後の実施区域の様子

### (3) 植生復元に関する検討会の開催

平成18年2月に行った検討会には、信州大学の土田先生をはじめ、駒ヶ根市、宮田村、地元のNPO、山岳会などから約30人が参加し、今後の植生復元の進め方などについて活発な議論が行われました。

会議では、まずこれまで行ってきた植生・環境調査の結果、平成17年9月に行ったヤシ繊維マットによる植生復元の試みに関する報告、信州大学によるリモートセンシングを活用した調査の詳しい内容の説明が行われた後、当センターから今後の活動の進め方について説明を行いました。

木曾駒ヶ岳周辺においては、登山者の踏み荒らし

による植生荒廃の見られる場所がまだ随所に見られるため、平成18年度以降についても、周辺調査及びヤシ繊維マットの敷設等を実施し、植物群落への踏み込み等の抑止に努めていきたいとの方針を説明したところ、参加者からは「ターゲットとなる植生を見定めた上で、その植生へと誘導するための最適な方法を選択することが重要」などと言った意見が出されました。

また、その他にも「木曾駒ヶ岳周辺全体の植生復元計画を立てた上での実施を」「地域全体の自然を保全する一つに植生の復元がある。本格的にやる体制づくりが必要」など幅広い観点からの取組を求める意見が多く出されました。

### (4) 今後の進め方について

検討会では、より多面的な調査と分析に基づく計画づくりと事業実行の必要性が指摘されましたが、当センターとしては、ボランティア等による植生復元の試み自体は、訪れる人の意識向上のためにも少しずつでも良いから続けていきたいと考えています。

これから木曾駒ヶ岳周辺全域での自然再生を図っていくためには、少なくとも中央アルプス脊梁部分全域での環境調査や植生復元のための計画づくりは不可欠ではないかと考えられます。多数の観光客が訪れる場所でもあるため、オーバーユース対策等についてもまだまだ検討が必要です。

これらの課題すべてに取り組むとなると、当センターの予算・人材の規模をはるかに超えるものとなってしまいそうですが、今後は、長野県との連携や環境省の自然再生事業への採択も視野に入れつつ、どのように自然再生を図っていくのか、その中で当センターとして何が出来るのかを考えながら来年度以降もこの活動に取り組んでいきたいと思っています。

また、今回の調査報告書については、ホームページ等を通じて概要を公表すると共に、希望者に配布していきたいと考えています。興味のある方は是非当センターまでご連絡下さい。

## 「木曽川・森づくり in 赤沢」を開催

昨年9月3日、当センターでは、木曽川に関わる上下流住民が森林整備を通じて交流を図るイベントを、長野県上松町の赤沢自然休養林において開催しました。当日は長野県内及び下流域の愛知、岐阜両県から約80人が参加し、ヒノキ林の間伐作業や森林観察を体験しました。

冒頭、関中部森林管理局長から「水の交流」、「木の交流」、「人の交流」をキーワードに、木曽川の国有林を通じた上下流の交流を図り、国民参加の森づくりを進めていきたいとの挨拶があり、その後、参加者は40人ずつ2班に分かれ、A班は間伐作業、B班は自然観察会に向かいました。



挨拶する関中部森林管理局長(当時)

間伐作業では、蜂よけの網をヘルメットにつけるのが初めてという人が多く、暑くて大変と言う声も聞かれましたが、作業に臨む姿勢は真剣そのものでした。参加者は2人1組になり、息を弾ませながら一生懸命に鋸をひきましたが、林齢の高いヒノキの人工林はさすがに手強かったようで、どうしてもかかり木が出てしまいました。この日の作業では、木がかかると同時に、当センターの職員らが木回しやチルホールを使って地面に倒して回るといった光景が会場のあちこちで見られました。

また、自然観察会では、森林鉄道からの景色を楽しんだ後、ラグビーやサッカーの夏合宿で有名な長野県菅平に事務所を置くNPO法人やまぼうし自然学校のインストラクターの案内で、赤沢自然休養林内の自然観察を行いました。分かりやすく、人を飽きさせない説明ぶりに、観察会に同行した職員の一人は、この日は一人の生徒として良い勉強になったと感想を語ってくれました。

昼食後は、A班とB班を入れ替えて午前中と同じプログラムに取り組んだ後、閉会式を行ってイベントを終了しました。参加者からは、「森の歴史・御神木伐採の話し等勉強になった」「山が好きなので自然の中で作業ができて嬉しい。来年も実施されるようなら是非参加したい」といった意見が寄せられました。今年も皆さんに大いに楽しんでもらえるようなイベントにしていきたいと思います。



間伐作業に取り組む参加者ら



かかり木処理を指導する古野企画官

## グリーンボランティア・サミットを開催

中部森林管理局指導普及課と当センターでは、紅葉に色づく長野県上松町の赤沢自然休養林において、10月25、26日の両日、中部森林管理局管内の「ふれあいの森」や「悠々の森」等の協定団体や管内の国有林をフィールドに活躍している森林ボランティア団体等50名と、各森林管理署の森林ふれあい係長等が参加し、グリーンボランティア・サミットを開催しました。

このサミットは、従来実施していた「ふれあいの森」の協定締結団体との森林ボランティアネットワーク会議を拡充し、管内の森林ボランティア団体等が一堂に会して学び交流できる機会を設け、ボランティア団体等の支援及び国民参加の森林づくりの一層の推進を図ることを目的に開催したものです。

初日、格段怠惰今後活動していく上で役立つ各ワークショップ（チェーンソーの取扱い、木エクラフト、ネイチャーゲーム）を実施し、その後、近畿大学生物物理工学部講師の新田和宏先生より「緑の雇用事業とボランティア」と題して、見えるボランティアと見えないボランティアについての講演をいただきました。

2日目は「赤沢を歩こう」と題して、森林鉄道に乗車した後、自然休養林内を約2時間散策しました。

参加者からは、「情報のネットワークづくりに大変役立った」「今後の活動に役立てていきたい」「継続開催を望む」等の前向きな意見をいただき、各森林ボランティア団体等が今後の活動に役立てたいという熱意が伝わる2日間となりました。



チェーンソーの目立ての指導



木エクラフトに取り組む参加者



全てのプログラムが終わったの記念撮影



ネイチャーゲームの一コマ

## 地元NPOと連携した城山史跡の森における活動

当センターでは、長野県木曾町福島の「城山史跡の森」において、NPO城山史跡の森倶楽部（以下同倶楽部）や木曾町役場などと協力して拠点整備活動を行っています。

平成16年度の11月に同倶楽部が設立され、城山国有林を管理する木曾森林管理署との間に協定が締結されたのを皮切りに、12月から3月にかけては、同倶楽部と当センターとの共同で案内用のパンフレットを作成するとともに、同倶楽部のコネクションを活かして名古屋圏などへの宣伝活動を行うなど新年度へ向けての準備を行いました。

そして平成17年度、雪が融ける4月からいよいよNPO等と連携した城山における活動が本格的に開始されることとなりました。

### ○木曾「城山史跡の森」に歩道を新設

平成17年度の活動は、まず歩道の新設作業から始まりました。もともと城山国有林はレクリエーションの森（風致探勝林）に指定されており、ある程度の歩道は整備されていましたが、町の観光施設等とフィールドを直につなぐコースを新設することにより、より一層利便性を向上させ、町外からのハイカーなどが古い宿場町の町並みと豊かな自然を同時に楽しめるようになればとの願いを込めて取り組んだものです。

作業は、史跡の森倶楽部の会員や当センター職員など延べ89名が参加して行われ、約500mの歩道を延べ4日間かけて見事に完成させました。作設にあたっては、近くに倒れていた古木等を材料として活用して階段を作るなど工夫をこらしており、とても素人の手によるとは思えない立派な歩道ができあがりました。

### ○本格的な活動に向けた研修会を実施

冬の間の準備が実を結び、GW期間中には名古屋圏から城山への日帰りツアー等が組まれる状況となっていました。史跡の森倶楽部には森林ガイドの経験のある会員が少なかったことから、4月21日、当センターの協力のもと、森林案内のガイドを養成するための研修会が行われました。

研修会には「名もない山にも文化や歴史がある」を

合い言葉に、城山の自然や歴史に関する知識を身に付けようと集まった有志20名が参加しました。参加者は、出来上がったパンフレットを手に、新設したばかりの歩道等を散策しながら城山の歴史や植物等お互いの得意分野の知識を出し合いました。



史跡の森倶楽部の会員による歩道新設

### ○自然観察会など様々なイベントを実施

GW期間中には延べ300名程の方が城山を訪れ、参加者は、史跡の森倶楽部の会員や当センター職員のガイドで色鮮やかな新緑の山を堪能しました。雪が融けた歩道沿いには、ちょうどスミレやネコノメソウなどの花が開花の時期を迎えており、参加者の目を存分に楽しませていました。

また、GW期間中のイベントには名古屋圏だけでなく地元の方々も多く参加し、意外と知らない身近な自然のすばらしさを体験しました。参加者の一人は「普段見慣れてはいるが、山に入ったのははじめて。こんなに良いところならもっと来たい」と言っていました。

城山では、その後も春夏を中心に森林・鳥類・昆虫等の観察会、下流域からの森林浴ツアー等のイベントが多数実施され、史跡の森倶楽部にとっても大忙しの一年となりました。参加者の反応はおおむね好評で、初年度にしてはまずまずの成果だったようですが、まだまだガイドができる会員は少なく、今後は質、量ともに充実させていく必要もあります。会員の皆様の更なる活躍に期待したいと思います。



自然観察会で見られたミヤマノコノマソウ

### ○木曾町による積極的な整備

城山の整備には地元木曾町役場も力を入れています。昨年夏には、町民の寄付などを活用してかつて木曾川にかかっていた江戸時代の木橋（行人橋）を復活させ、木曾町の市街地から城山の登山道へのアクセスが格段に向上しました。橋のもとには足湯も設置されており、ハイキングなどで疲れた身体を癒すにはもってこいです。

また、昨年秋から冬にかけて城山の歩道、あずまや等を整備し、以前と比べると格段に安全で快適な山歩きが出来るようになりました。



きれいに整備された権現滝付近の歩道

### ○平成18年度の活動に向けて

例年よりも早く雪が降った12月初旬、当センター、同倶楽部、木曾町役場が共同で、城山における平成18年度の活動計画を策定するための現地視察を行いました。

葉の落ちる冬期は、見晴らしも良く、動物の足跡な

ども分かり易いため自然観察にはもってこいです。標高差も少なく町からのアクセスも良いため、冬山に慣れていない人でも気軽に雪中でのトレッキングが楽しめるのも、木曾城山の魅力の一つだとあらためて感じました。

この日は天気も良く、参加者全員が城山のすばらしさを再認識する良い機会となりました。当センターでは、今後も様々な方面と連携し、力を合わせて城山を魅力あるフィールドにしていきたいと考えています。

### あしがき

ふれあいセンターの発足後2年目が終わろうとしています。手探りで地域ニーズを掘り起こした昨年と違い、本年度は周囲の暖かな応援もあり幼いながら自力歩行を始めることができたと感じております。

まず、森林環境教育の拠点として整備を始めた史跡の森(城山国有林等)においては、「城山史跡の森倶楽部」のボランティアにより、歩道や案内標識の整備が進み、昨年当センターで作成したフィールドガイドも功を奏し、団体客だけでも1800人を越える誘客がりました。

また、倶楽部からは、植物の先生を編集者とする「城山史跡の森の植物」の発刊計画が出来るなど盛り上がり、史跡の森の活動を介して、地域と国、県、森林所有者、林業高校などの間に連携の輪が生まれ、会議・作業等に約360人の参加がありました。

また、木曾川上下流交流等で森林整備の作業に参加するNPOの方からは「国有林との関わりが難しかったが、窓口が出来るととても作業がやりやすい」という感謝の言葉をいただき、森林教室や林業体験に参加していただいた木曾地域の学校の先生方からは「身近にある森林でも接することが出来ずにいたが、楽しく勉強になった」などと評価をいただくことが出来たと考えています。

これからも地域に喜ばれ親しまれる仕事を続けることを目指して更に発展させていきたいと考えています。

(所長 鷹野正美)